

## 入国児童生徒をとりまく人々の意識 —教師・保護者・日本語指導員の場合—

内田 紀子

### 1. はじめに

現在、日本で暮らす外国人には留学生、ビジネスマン、研修生等に加えてニューカマーと呼ばれる難民、中国帰国者、労働者、国際結婚のために来日した人々等がいる。ニューカマーの数は増えてきており、自ずと彼らの家族として来日する学齢期の子ども達の数も増加している。入国した子ども達はそれぞれの学校や地域等で様々な問題に直面している。入国児童生徒を取り巻く状況、彼らが抱えている問題は個々のケースによりいろいろであると考えられ、要因も様々であると予想される。本研究においてはそれらの問題の要因の一つとして入国児童生徒の人的環境を考え、特に「入国児童生徒をとりまく人々の意識」に焦点をあて、彼らの互いの関わり方、互いの意識の違いについて考えていく。

本論における「入国児童生徒」は外国人児童生徒（すでに日本国籍を取得している児童生徒を含む）を示す。「保護者」は日本語を母語としない入国児童生徒の保護者を示す。「日本語指導員」は学校に所属せず、巡回の形式を取りながら定期的に日本語指導に携わる指導員を示す。

### 2. 研究目的

本研究の目的は、入国児童生徒をとりまく人々を「教師」「保護者」「日本語指導員」に限定し、三者の意識について以下の点を明らかにすることである。

入国児童生徒をとりまく人々は互いに連携し合っているのか。連携に問題があるとしたら、その要因は何か。

### 3. 先行研究

入国児童生徒に関する研究は言語習得に関するもの（一二三 1996）、語彙調査研究

(工藤 1996) がある。しかし近年は入国児童生徒に関わる問題は広域的なものになってきており、教科学習の重要性に触れた研究 (矢崎 1998)、国語教育と日本語教育との連携の重要性に触れた研究 (堂寺 1999) などがなされてきており、入国児童生徒の周辺に注目した研究としては教師の言語教育観を調査した研究 (岡崎 1998) があげられる。しかし、入国児童生徒をとりまく人々に焦点をあてた研究は、特に日本語教育においてまだごく限られたものである。

Wilcox(1982)は、子ども達への周囲の期待が子ども達の意識を作り上げていると述べ、Clement(1987)は社会的要因が第二言語の熟達を決定する要因であると述べている。Cummins (1996) は、マイノリティの子ども達にとって子どもをとりまく人々のエンパワーメントが必要であるとし、「エンパワーメントは一方的に与えられるのではなく、互いに協力することで達成される」と述べている。入国児童生徒をとりまく人々の状況を述べることは、入国児童生徒の置かれている状況を浮かびあがらせるということであり、入国児童生徒の問題は周囲の問題であると考えられる。

#### 4. 研究方法

本研究は質的調査として、観察、参与観察、インタビュー調査を行なった。具体的な方法は以下の通りである。

地域：東京近郊のX市およびY市。X Y市共に外国人登録をしている人は4500～5000人おり、住民の1.5%～2.2%にあたる。両市とも外国人を受け入れてきた歴史があり、外国人人口が多い地域である。

対象者：X Y地域に滞在する入国児童生徒の保護者13名及び同地域で活動する教師8名、日本語指導員2名が対象である。本論では主に入国児童a b cそれぞれの保護者3名、学級担任3名、日本語指導員2名を対象としている。調査開始時において、aは小学2年生男子中国籍来日1年、bは小学3年生男子フィリピン籍来日2年、cは小学1年生女子中国生まれ来日6ヶ月である。

期間：1999年4月～10月

a b cの母親(6回～16回)、a b cの学級担任(各2回)、日本語指導員AB(各2回)にインタビューを実施した。観察はa bの在籍小学校(各2回) cの在籍小学校(3回)、参与観察はaの在籍小学校(12回) bの在籍小学校(9回)である。

データ：インタビュー及び参与観察の様子をテープ録音したものを文字起こししたものと観察・参与観察時に記していたフィールドノーツをデータとした。

インタビュー内容：インタビューの流れに沿って質問する半構成インタビューを行なった。主な質問内容は以下の通りである。①今困っていること②どんな時に子どもを叱るか、誉めるか③教師／保護者／日本語指導員への要望④子どもへの期待⑤将来について⑥家庭／教室／指導の場での子どもの様子

## 5. 分析結果

分析した結果は以下の3点である。

- 1) 教師、保護者、日本語指導員の三者は互いに相手が何を考え、どんな活動をしているのかを理解していない。

### <保護者の情報>

- ・日本語指導員は保護者の情報を知らない。
- ・保護者は教師と積極的に関わらず、情報を積極的に提供しない。

### <教師の情報>

- ・日本語指導員は教師と関わる機会、情報を得る機会が限られている。

### <日本語指導員の情報>

- ・教師は日本語指導員の情報を十分に把握していない。

- 2) 教師、保護者、日本語指導員の三者は入国児童生徒の現状を把握、理解していない。

- ・帰国する時期について正確に把握していない。
- ・母語保証の現状について理解していない。
- ・在籍級での子どもの現状を把握していない。

- 3) 日本語指導員の位置付け、日本語指導の場の位置付けが曖昧である。

- ・日本語指導の場所が勉強する場所として捉えられていない。
- ・日本語指導に関する事を決定する基準が定まっていない。
- ・日本語指導より在籍級の授業が優先される。
- ・日本語指導の場と同様に国際学級の位置付けも曖昧である。

## 6. 考察

分析結果であげられた3点についての考察は以下の通りである。

1)なぜ教師、保護者、日本語指導員の三者は互いに相手が何を考え、どんな活動をしているのかを理解していないのか。

- ・互いのことがわからなくても大きな支障はないと考えるためにそのままにしておく。
- ・それぞれが自分たちの抱えているの問題を解決することで精一杯である。
- ・情報を交換し共有する制度が整っていない。
- ・保護者、日本語指導員は問題を抱えこんでしまう。

2)なぜ教師、保護者、日本語指導員の三者は入国児童生徒の現状を把握、理解していないのか。

- ・三者はそれぞれの持つ尺度のみで子ども達をはかり他の尺度を共有できない。
- ・バイリンガルに関する理論、言語習得に関する理論が浸透していない。

3)なぜ日本語指導員の位置付け、日本語指導の場の位置付けが曖昧であるのか。

- ・日本語指導の意義がはっきりしていない。
- ・日本語指導が指導の時間を切り割で担当していると理解されているために「指導がなくてもなんとかなる」と考えられている。

### まとめ

入国児童生徒をとりまく人々の連携はうまく機能しているとはいえない状況にある。入国児童生徒の問題が彼らをとりまく人々の問題であるとすれば、彼らをとりまく三者の互いの関わりの希薄さはそのまま入国児童生徒の問題に反映していると考えられる。「伝わらない互いの情報」「把握していない入国児童生徒の現状」「曖昧な日本語指導の位置付け」という状況は互いに関係しあい、それぞれを強化しているとも考えられる。

連携が効果的に機能するためには、制度、教師・指導員への研修の充実が不可欠であり、「場」を開かれたものにすることが重要である。互いの場をオープンにし情報を交換することによって、問題を皆で共有することが可能になるからである。入国児童生徒をとりまく人々が自分の世界だけを見つめ抱え込むのではなく、他者を知り他者の眼を借りるという作業を行なうことで、現状を変えることができるのではないかと考える。入国児童生徒の問題は全ての子どもの問題であり、入国児童生徒の問題解決への道は全ての子どもの問題解決への道であると言えよう。

## 7. 今後の課題

本調査研究においては入国児童生徒をとりまく人々の相互の意識について言及した。今回の調査では触れていないが「とりまく人々の状況が子どもの状況にどう影響しているか」ということは今後忘れてはならない重要な観点であると考ええる。

以上の点をふまえて、今後は「入国児童生徒に対する意識、期待感はどのようなか」「入国児童生徒への意識に対して、入国児童生徒はどう反応しているのか」という点について考えていきたい。

又、周辺に位置する日本語指導の場が三者の関係を変える可能性を持つと考え、日本語指導の場のあり方が重要な要となる可能性があるということについても考えていきたい。

## 参考文献

- (1) 伊東佑朗 1999『外国人児童生徒に対する日本語教育の現状と課題』日本語教育 100 号 p.33～44 日本語教育学会
- (2) 一二三朋子 1996『年少者の語彙習得過程と言語使用状況に関する考察－在日ベトナム人子弟の場合』日本語教育 90 号 p.13～24 日本語教育学会
- (3) 岡崎敏男 1998『年少者日本語教育に関する教師の言語教育観』日本語科学 4 号 p.74～98
- (4) 志水宏吉他 1998『教育のエスノグラフィー－学校現場の今－』嵯峨野書院
- (5) 堂寺泉 1999『外国系児童の授業参加と言語学習－国語と日本語をどうつなげるか－』第3回社会言語科学会大会資料
- (6) 箕浦康子 1999『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房
- (7) 矢崎満夫 1998『外国人児童に対する教科支援のための日本語教育のあり方』日本語教育 99 号 p.84～95
- (8) Jim Cummins 1996 “Identity and Empowerment” In Negotiating Identities : Education for Empowerment in a Diverse Society Chapter 1. p.1～26 California Association for Bilingual Education
- (9) Kathaleen Wilcox 1982 “Differential Socialization in the Classroom: implication for Equal Opportunity” In Doing the Ethnography of Schooling part III. p. 269～309 Waveland Press, Inc

- (10) Richard Clement 1987 “ Second Language Proficiency and Acculturation:an investigation of the effects of Language Status and Individual Characteristics” journal of language and social psychologyvol.5

(お茶の水女子大学大学院)